

94-1 湧水を連ねながら五島美術館と静嘉堂文庫へ (9.5km)



静嘉堂文庫美術館

田園都市線上野毛駅から、武蔵野台地崖(ハケ)下の湧水を連ねながら五島美術館と静嘉堂文庫などをたずねる。

地図豆知識 4-1：関東平野の変遷と河岸段丘

地質年代の関東平野の変遷を大急ぎでたどってみると、約12～13万年前の海進最盛期、関東平野は全面的に海であったが、(下末吉海進)、その後、海面は周期的に上昇と低下を繰り返し、この時期に関東平野の基盤となる武蔵野台地や相模原台地が形づくられた(約10～6万年前)。

その後、海面が約100m以上も低下して東京湾が陸となった(約2万年前)が、再び海面が上昇し、入江は関東平野の奥深くにまで進んだ(約6000年前)。そして、歴史時代に入ると、土砂の流入によって河口には三角洲が発達し、現在のような関東平野が作られた。

こうした地形変遷過程の一時期、河床の高度が安定したのちに地盤の隆起あるいは海面の低下が起き、その後河川流水による浸食によって河床が大きく低下した結果、河川氾濫原の周囲に形成されるのが河岸(河成)段丘である。

同じような段丘面と段丘崖からなる海岸(海成)段丘は、やはり地盤の隆起あるいは海面の低下に関連して海岸線に沿って形成された階段状の地形である。この場合、段丘面はもとの海底面、段丘崖は海流によって浸食された海蝕崖である。

両者を見分けるには、現河川や海岸周辺といった存在場所だけでは不十分ではなく、むしろ段丘に近くに存在する微地形や堆積物などを調査して行なう必要がある。河岸段丘も海岸段丘も日本各地で多く見られる。



かつてあった、泉の地図記号

地図豆知識：崖地の自然

関東平野では、基盤となる地層の上に関東ローム層と呼ばれる富士山や箱根火山の火山灰が堆積していて、基盤（礫や粘土層）は水分を含んでいる。したがって、ショートケーキの切り口のように粘土層などがむき出しになった浸食崖のちょっとした谷間からは、浸み出す湧き水や泉が見られる。

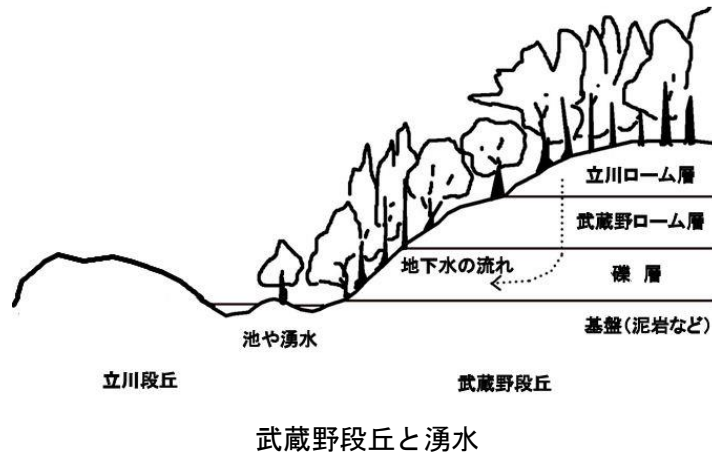
一方で、こうした浸食崖の地形は日本各地どこにもあって、豪雨による崖崩れなどの災害被害を受けやすい場所である。したがって、従来周辺住民は地域を災害から守るために、崖地の開発を出来るだけ遅らせてきた。崖の上下には住宅地が広がっても、その狭間になった傾斜地には鬱蒼とした常緑広葉樹林が残されてきたのである。

ところが、東京のような大都会では、こうした地域にも開発の手が入っている。それでも一万分の一の地形図をよく見ると、込みあった等高線の連なりの中に、森林地を示す緑色の塊を随所に発見できる。

地図豆知識：国分寺崖線

東京都の西部に位置する国分寺周辺にみられる崖を「国分寺崖線（ハケ）」と呼び、これは（河岸）段丘崖である。国分寺崖線ほどの段差は見られないが、南に位置する調布市街地の先にも、もう一つの河岸段丘と崖があって、それぞれ武蔵野段丘、立川段丘と呼ぶ。

かつて文学作品にも登場したという武蔵野のハケの道を歩きながら、崖地の自然は現在どのようになっているだろうか、湧水はどのくらい残っているだろうか、河川浸食によって作られた崖がどれほどのものか、併せて都市近郊に自然がどれほど残っているかを確認してみると楽しい。



武蔵野段丘と湧水

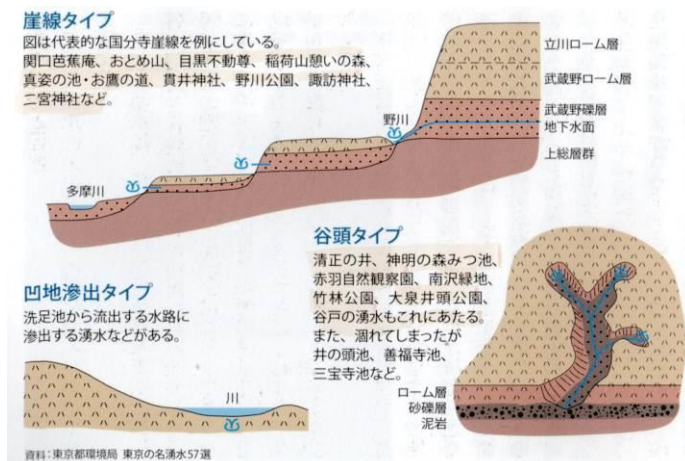
湧水の種類

湧水は以下のようなタイプに分類される。それぞれの湧水がどのタイプのものか観察してみるといい。

崖線タイプ：川によって浸食された台地の段丘崖や断層面に露出した砂礫層から湧くもの。砂礫層の下部は水を透しにくい粘土層や泥岩になっていることが多い。湧水を供給するかん養域はごく狭い範囲である。

谷頭タイプ：台地上の馬蹄型や凹地形などをした谷頭（台地面の谷の奥）の地形的に水を含む層が露出したところから湧くもの。地下水が湧水する力で谷頭地形が形成されることが多く、かん養域はごく広い範囲である。

凹地しみだしタイプ：川床や凹地に地下水や伏流水が圧力でしみだしてできる湧水。かん養域は地下水や伏流水に関連した広い範囲である。



湧水の分類（東京都環境局「東京の名水57泉」から）

【道順】

東急大井町線上野毛駅→上野毛自然公園（湧水？）→五島美術館（湧水）・旧美空ひばり邸・清宮（島津）邸??→東急大井町線を跨ぐ（富士見橋）→法徳寺・行善寺（玉川八景）→東急田園都市線を跨ぐ→瀬田多摩川神社・玉川大師・玉川教会→静嘉堂北園地（湧水）・静嘉堂文庫美術館（湧水）→岡本公園民家園（湧水？）→岡本公園先丸子川→氷川神社→大蔵三丁目公園（湧水）→国道 246 号→砧六丁目→小田急小田原線祖師ヶ谷大蔵駅



静嘉堂北園地

【街歩き解説】

五島美術館

五島美術館は、昭和 35 年（1960）4 月 18 日に私立（財団法人）の美術館として、東京都世田谷区上野毛に開館した。美術館設立の構想は、東京急行電鉄株式会社の元会長・五島慶太（1882－1959）によるもの。

五島美術館の所蔵品は、五島慶太が戦前から戦後にかけて蒐集した日本と東洋の古美術品（明治期以前）をもとに構成されている。

敷地は庭園を含めると約 6000 坪。武蔵野の雑木林が多摩川に向かって深く傾斜する庭園には、「大日如来」や「六地藏」など伊豆や長野の鉄道事業の際に引き取った石仏が点在し、「上野毛のコブシ」（東京都指定天然記念物）やツツジ、枝垂桜など、季節ごとに多彩な花を咲かせる。

東南方向にあった、旧美空ひばり邸や島津邸は健在だろうか？

静嘉堂文庫美術館

静嘉堂は、岩崎彌之助(1851～1908 彌太郎の弟、三菱第二代社長)と岩崎小彌太(1879～1945 三菱第四代社長)の父子二代によって設立され、国宝 7 点、重要文化財 83 点を含む、およそ 20 万冊の古典籍(漢籍 12 万冊・和書 8 万冊)と 6,500 点の東洋古美術品を収蔵している。

明治期の西欧文化偏重の世相の中で、軽視されがちであった東洋固有の文化財を愛惜し、その散亡を怖れた岩崎彌之助により明治 25 年(1892)頃から本格的に収集が開始され、さらに小彌太によって拡充されまた。彌之助の収集が絵画、彫刻、書跡、漆芸、茶道具、刀剣など広い分野にわたるのに対して、小彌太は、特に中国陶磁を系統的に集めている点が特色となっている。

文庫の建物は、桜井小太郎(1870~1953)の設計により、大正 13 年(1924)に建てられた。鉄筋コンクリート造 2 階建スクラッチ・タイル貼りの瀟洒な外観は、当時のイギリス郊外住宅のスタイルを顕著に表している。

庭園内にある廟(納骨堂)は、桜井の師である英国人建築家、ジョサイア・コンドル(1852~1920)の設計によるもので、明治 43 年(1910)に建てられたもの。鹿鳴館の設計で知られるコンドルは、岩崎彌之助の深川邸洋館(現・清澄公園内、現存せず)や高輪邸(現・開東閣)、三菱一号館(2009 年復元、現・三菱一号館美術館)など、岩崎家ゆかりの建物も数多く手がけている。

玉川大師

大正 14 年(1925 年)竜海阿闍梨の開基。地下霊場があることでよく知られている。

地下霊場とは本堂の地下、深さ約 5m、長さ 100m に及ぶ奥の院で、四国八十八ヶ所、西国三十三番霊場の 大師・観音があり、一巡りすることによって四国遍路と西国遍路さながらのお参りができるというもの。暗黒の闇の中、狭い通路を手探りで歩むときには誰もが思わず恐怖を覚える。暗闇の先、薄明かりの中に四国八十八箇所の本尊が並んでおり、ほかにも霊場内には数多くの仏像や壁画がある。

コースマップ



+* * *+ オフィス 地図豆 Yamaoka mitsuharu +* * *+